

# 令和6年度 全国学力・学習状況調査における 佐賀市の児童生徒の結果



「全国学力・学習状況調査」ってどんな調査？

## ■調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善策に役立てる。
- 上記のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## ■調査対象

佐賀市立小学校第6学年、佐賀市立中学校第3学年

## ■調査内容

### (1) 教科に関する調査（国語、算数・数学）

出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し以下のとおりである。

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て、実践し評価・改善する力等

※ 調査問題では、上記①と②を一体的に問うこととする。

### (2) 生活習慣や学習環境等に関する質問調査

#### ① 児童生徒に関する調査

・学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

(例) 学習に対する興味・関心、授業内容の理解度、基本的な生活習慣、家庭学習の状況など

#### ② 学校に対する調査

・指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査

(例) 授業の改善に関する取組、学校運営に関する取組、家庭・地域との連携の状況など

## ■調査実施日

令和6年4月18日（木）

学力は、知識や技能に加えて、自ら学び、判断・行動し、問題解決する資質や能力等までを含めたものです。全国学力・学習状況調査は小学6年生・中学3年生という限られた学年が対象であり、教科は今年度は、国語、算数・数学に限られています。したがって、ここに示しております結果につきましては、「学力の特定の一部分」であり「学校教育活動の一側面を示すもの」とご理解ください。

各学校では、「調査結果分析検討委員会」を組織し、学習状況調査の分析をしたり、考察と指導法改善の方策について協議をしたりしています。個々の学校の結果については、各学校のホームページを御覧ください。

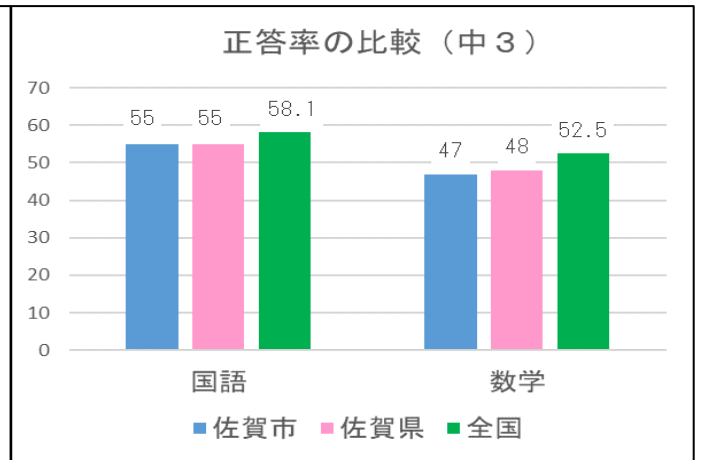
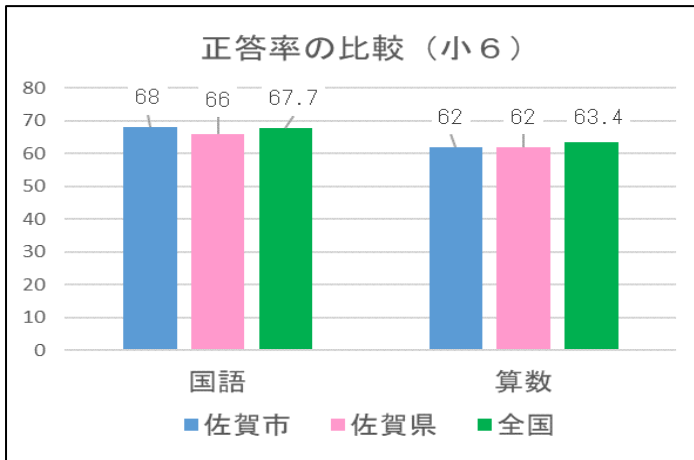
## ■佐賀市における調査対象

佐賀市立の小学校 35 校、中学校 18 校

令和6年度の佐賀市立小中学校の児童・生徒の結果は？



### ① 教科に関して

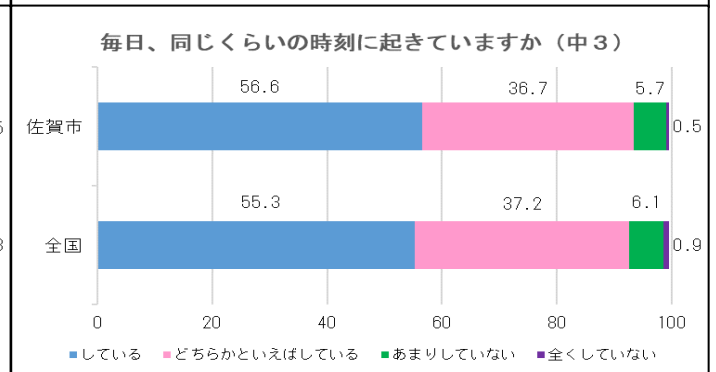
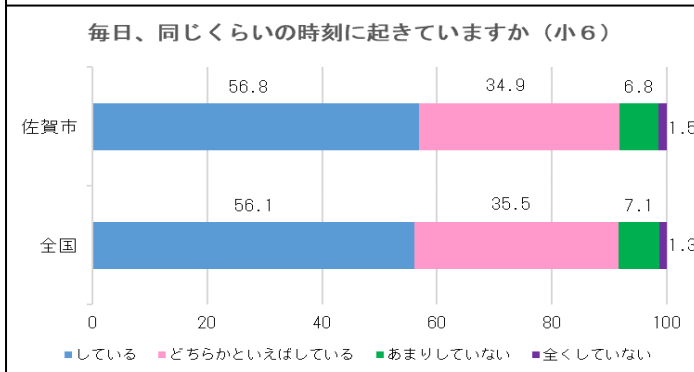
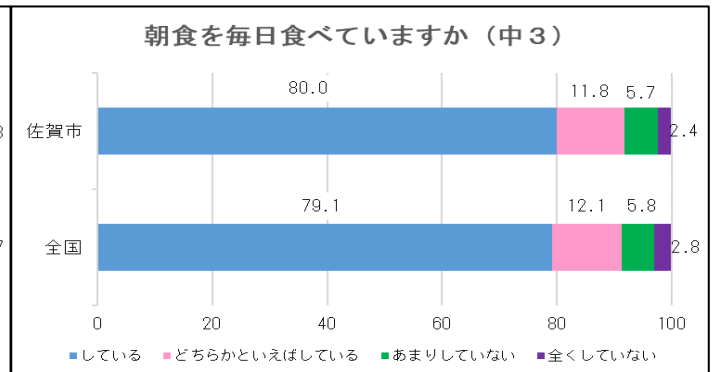
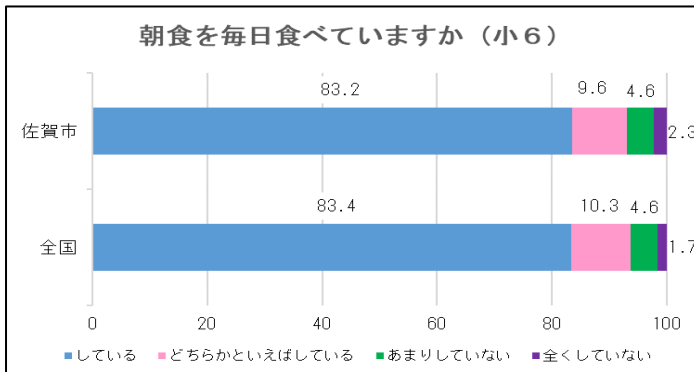


	佐賀市	佐賀県	全国
国語	68	66	67.7
算数	62	62	63.4

	佐賀市	佐賀県	全国
国語	55	55	58.1
数学	47	48	52.5

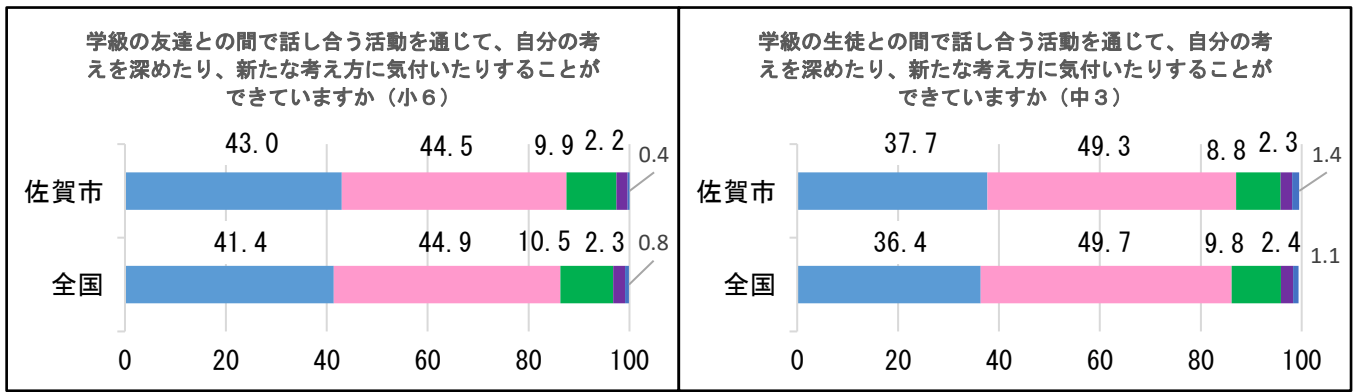
- 小学校6年生では、国語は、全国平均正答率を0.3ポイント上回っています。算数は、全国平均正答率を1.4ポイント下回っています。中学校3年生では、国語は、全国平均正答率を3.1ポイント下回っています。数学は、全国平均正答率を5.5ポイント下回っています。
- 文科省によると、地域による大差は無いということです。詳細な分析は4ページ以降をご参照ください。

### ②-1 生活習慣に関して

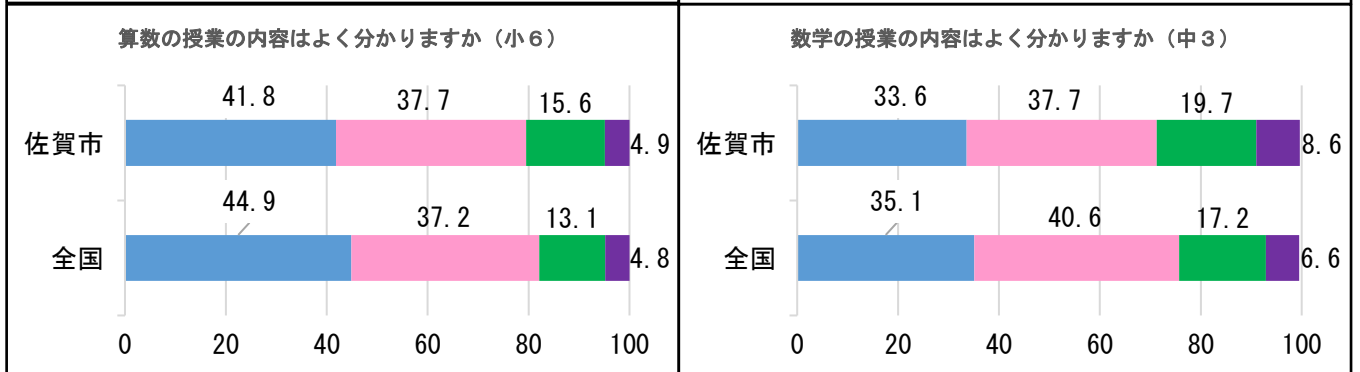
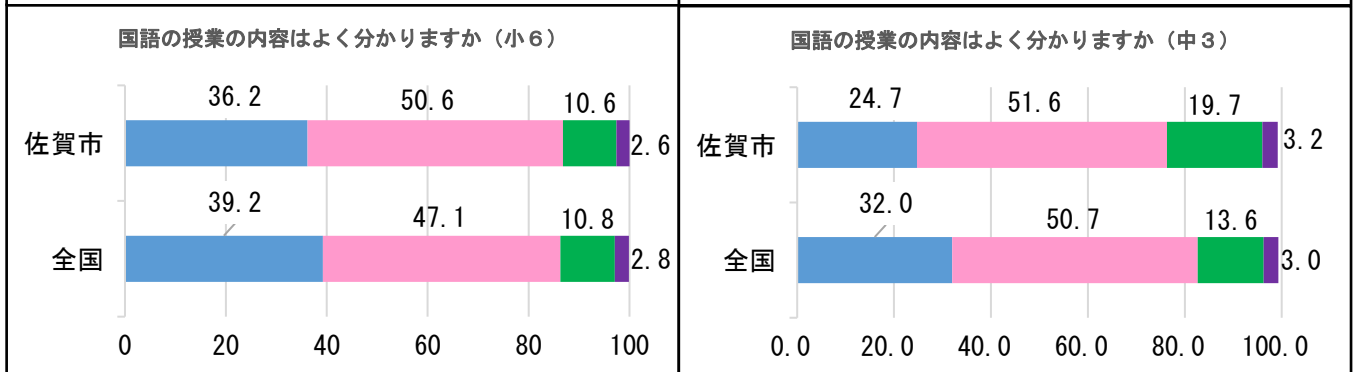
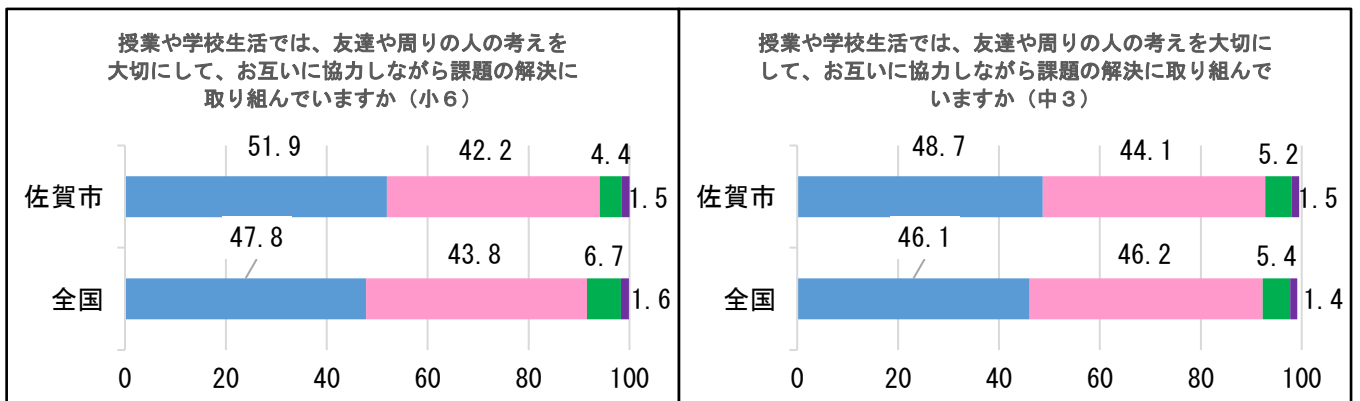


- 基本的な生活習慣（朝食と起床）の質問項目では、佐賀市の児童生徒は、全国平均とほぼ同等の結果でした。児童生徒質問と学力のクロス分析をみても、「朝食を毎日食べている」、「毎日同じくらいの時刻に起きています」と回答している児童生徒の方が、教科の平均正答率が高い傾向があります。今後も、家庭と学校が連携をして、「早寝・早起き・朝ごはん」の生活習慣が身につくようにしていく必要があります。

## ②-2 学習方法に関して



■当てはまる ■どちらかといえば当てはまる ■どちらかといえば当てはまらない ■当てはまらない ■話し合う活動を行っていない



■当てはまる ■どちらかといえば当てはまる ■どちらかといえば当てはまらない ■当てはまらない

- 話し合う活動を通じて、自己の考えを深め、他者の考えを尊重することができると感じている児童生徒が多いことが分かります。その一方で、教科内容がよく分ると回答した生徒は全国平均と同等かやや低い傾向にあります。この結果より協働的な学びが各学校で意欲的に実践されているが、それが授業内容の理解につながっていないことが分かります。そのため、今後、学校においては、協働的な学びを行う意義を明確にしたり、学びの見通しをもてる「めあて」を設定したりするなど、児童生徒の確かな学力の醸成につながる協働的な学びのポイントを抑えた授業改善が必要であると思います。
- 佐賀市教育の基本目標「ふるさと『さが』を協働でつくる個性と創造性に富む人づくり」に向けて、相互に連携・協働して、可能性に挑戦する児童生徒を育てていきたいと思ひます。

◆ 令和6年度 全国学力・学習状況調査結果 《小学校・国語科》 ◆

■ 調査結果の概要

問題の結果																										
○全体	<p>・ 小学校国語全体では、全国正答率67.7に対し佐賀市正答率は68であり、0.3ポイント上回っている。設問数が14ある中で、そのうち8問は全国正答率を上回っている。また、平均正答率は全14問中9.5問で全国正答率と同じである。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>68</td> <td>67.7</td> <td>1.00</td> </tr> </table> <p>※ 佐賀市の平均は整数値で示されています。</p>	佐賀市	全国	対全国比	68	67.7	1.00																			
佐賀市	全国	対全国比																								
68	67.7	1.00																								
○評価の観点	<p>・ 知識・技能の観点では、全国69.1に対し佐賀市は71.2であり、2.1ポイント上回っている。思考・判断・表現の観点では、全国65.5に対し佐賀市は66.0であり、0.5ポイント下回っている。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th colspan="2">評価の観点</th> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td colspan="2">知識・技能</td> <td>71.2</td> <td>69.1</td> <td>1.03</td> </tr> <tr> <td colspan="2">思考・判断・表現</td> <td>65.5</td> <td>66.0</td> <td>0.99</td> </tr> </table>	評価の観点		佐賀市	全国	対全国比	知識・技能		71.2	69.1	1.03	思考・判断・表現		65.5	66.0	0.99										
評価の観点		佐賀市	全国	対全国比																						
知識・技能		71.2	69.1	1.03																						
思考・判断・表現		65.5	66.0	0.99																						
○内容	<p>・ 言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化に関する事項では、全国69.8に対し佐賀市は71.2であり、1.4ポイント上回っている。</p> <p>・ 話すこと・聞くことにおいては、全国59.8に対し佐賀市は59.1であり0.7ポイント下回っている。</p> <p>・ 書くことにおいては、全国68.4に対し佐賀市は69.0であり0.6ポイント上回っている。</p> <p>・ 読むことにおいては、全国70.7に対し佐賀市は69.5であり1.2ポイント下回っている。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th colspan="2">学習指導要領の内容</th> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td colspan="2">言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化（知・技）</td> <td>71.2</td> <td>69.8</td> <td>1.02</td> </tr> <tr> <td colspan="2">話すこと・聞くこと（思・判・表）</td> <td>59.1</td> <td>59.8</td> <td>0.99</td> </tr> <tr> <td colspan="2">書くこと（思・判・表）</td> <td>69.0</td> <td>68.4</td> <td>1.01</td> </tr> <tr> <td colspan="2">読むこと（思・判・表）</td> <td>69.5</td> <td>70.7</td> <td>0.98</td> </tr> </table>	学習指導要領の内容		佐賀市	全国	対全国比	言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化（知・技）		71.2	69.8	1.02	話すこと・聞くこと（思・判・表）		59.1	59.8	0.99	書くこと（思・判・表）		69.0	68.4	1.01	読むこと（思・判・表）		69.5	70.7	0.98
学習指導要領の内容		佐賀市	全国	対全国比																						
言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化（知・技）		71.2	69.8	1.02																						
話すこと・聞くこと（思・判・表）		59.1	59.8	0.99																						
書くこと（思・判・表）		69.0	68.4	1.01																						
読むこと（思・判・表）		69.5	70.7	0.98																						
○グラフ ※対全国比(国正答率=1.00)	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>項目</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>国語</td> <td>1.00</td> </tr> <tr> <td>知・技(観点)</td> <td>1.03</td> </tr> <tr> <td>思・判・表(観点)</td> <td>0.99</td> </tr> <tr> <td>言葉の特徴(内容)</td> <td>1.02</td> </tr> <tr> <td>話す・聞く(内容)</td> <td>0.99</td> </tr> <tr> <td>書く(内容)</td> <td>1.01</td> </tr> <tr> <td>読む(内容)</td> <td>0.98</td> </tr> </table>	項目	対全国比	国語	1.00	知・技(観点)	1.03	思・判・表(観点)	0.99	言葉の特徴(内容)	1.02	話す・聞く(内容)	0.99	書く(内容)	1.01	読む(内容)	0.98									
項目	対全国比																									
国語	1.00																									
知・技(観点)	1.03																									
思・判・表(観点)	0.99																									
言葉の特徴(内容)	1.02																									
話す・聞く(内容)	0.99																									
書く(内容)	1.01																									
読む(内容)	0.98																									



■調査結果の分析【指導改善について】

- (視点1)学んだことや自分の考えを言語化する言語活動を位置付けた学習の積み重ねについて  
国語科の学習において、「考えの形成」は、【話すこと・聞くこと】【書くこと】【読むこと】全ての学習過程に位置付けられている。今回は特に課題となった【読むこと】における「考えの形成」について述べる。『小学校学習指導要領解説 国語編』によると、「考えの形成」とは、文章の構造と内容を捉え、精査・解釈することを通して理解したことに基づき、自分の既有的知識や様々な体験と結び付けて感想をもったり考えをまとめたりしていくことと記されている。確かに「考えの形成」のためには、学習材についての理解が必要である。しかし、児童が学習材を十分理解してから考えの形成をするというプロセスでは、「考えの形成」の学習過程にたどり着くまでにつまずく児童が出てくる。その結果、「考えの形成」という学習を十分積み重ねられないという状況に陥ってしまう。そのため、「考えの形成」に必要な構造と内容の把握については学級全体で行ったり、精査・解釈をすることで学習が深まると考えられる文を教師が示したりして、全ての児童に「考えの形成」の学習を保證することが必要である。このことから、次の2点に着目し指導改善を行う必要がある。1点目は、その単元で身に付けさせたい資質・能力を教師が明確に把握しておくことである。その単元で児童が何を学ぶのかをはっきりすることで、そのために必要な足場かけを積極的に行うことができる。2点目は、児童が自分の考えを言語化するための言語活動の工夫である。児童が自分の考えを言語化するにあたって、児童が資質・能力を身に付けるために考えるべきことと、教師が教えたり示したりすることを区別し、言語活動の工夫を行う。身に付けさせたい資質・能力について考える場面を焦点化することで、全ての児童が自分の考えを言語化することができたという達成感を得ることができるようになると思われる。
- (視点2)国語科における家庭学習や自主学習の充実について  
今回の調査では、資料を活用して自分の考えを相手に伝えることや、物語において表現の効果、登場人物の相互関係などを読み取ることに課題が見られた。学校における学習活動では、学習指導要領を基に学習課題や言語活動を設定し、意図的に児童に身に付ける力として示し指導をしているが、これらの学習を児童自身の学びとして生かしていないというのが現状と言える。授業の中では、限られた配当時間の中で指導事項をおさえる必要があるため、課題の解決の一つとして、学びを生かした家庭学習への取り組みが考えられる。資料を活用して自分の考えを伝えるには、目的や相手、条件を捉えることが重要であるため、条件を与えた日記を書いたり、話したりする取り組みを段階的に(条件の数を増やしていくなど)取り組ませることも一策と考えられる。表現の効果や登場人物の相互関係などを読み取るには、教科書の内容だけでなく、物語文や新聞、詩などの様々な文章に触れることが大切である。多くの文章に触れることで、語彙力を高めたり、物語体験を積んだりすることができる。また、物語の登場人物を紹介する文章を書くなど、児童の実態に応じた課題に取り組ませることも有効だと考えられる。
- (視点3)他教科・他領域等と関連付けた指導  
「他教科・他領域と関連付ける」というと、各教科等の教材・題材を学ぶための「表現方法」のみを関連付ける実践が多く見られる。この場合、あくまで関連付いているのは、「表現方法」であり、その有効性や対象とする学年や教科における系統性を加味されたものではなく、効率性の向上のために行われているように見える。また、各教科等の指導において、児童が、各教科等の見方・考え方を働かせながら、解決に向かう学習経験を積まないと、児童は教材や題材内に閉じた思考・判断・表現しか行わないことにより、汎用的な思考が育まれない。その結果、条件が変わったり、情報が複雑になったりすると解決できない課題がある。このことから、児童が「何のためにするのか」「誰に向けてするのか」「どの力を使うのか」「どのような考え方をするのか」を単元びらきにおいて明示的に指導し、児童が自覚できるようにする。教師は、目的意識や相手意識をもって、情報を整理・活用するような場面を計画することで、国語の学びを他教科・他領域等にも生かすことができると思われる。

■評価の観点については、以下のように表記しています。

■内容については、以下のように表記しています。

評価の観点	表記
知識・技能	知・技
思考・判断・表現	思・判・表

内容	表記
言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化	言語の特徴
話すこと・聞くこと	話す・聞く
書くこと	書く
読むこと	読む



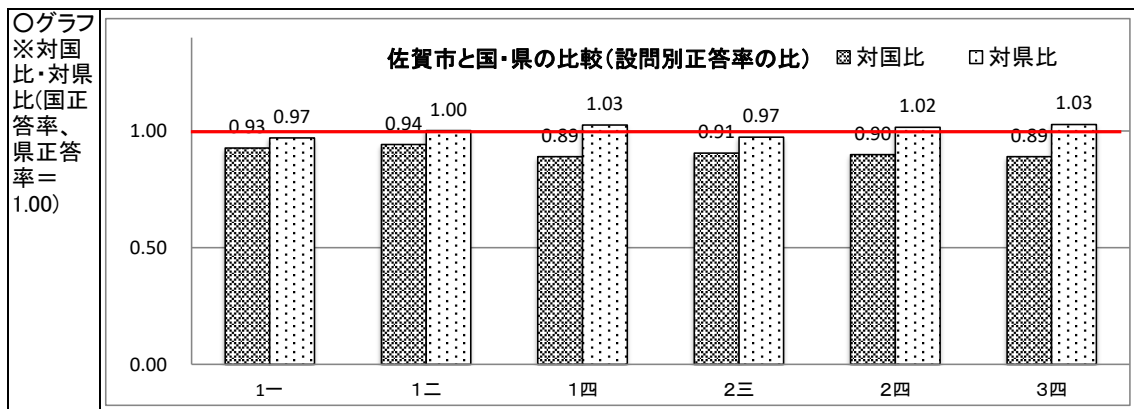
◆ 令和6年度 全国学力・学習状況調査結果 《中学校・国語科》 ◆

■調査結果の概要

問題の結果																					
○全体	<p>・ 中学校国語全体では、全国正答率58.1に対し佐賀市正答率は55.0であり、3.1ポイント下回っている。昨年度は0.8ポイント下回っていたのに対し、今年度は3.1ポイントと全国との開きが大きくなっている。設問数が15ある中で、そのうち2問は全国正答率を上回っている。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>55</td> <td>58.1</td> <td>0.95</td> </tr> </table> <p>※ 佐賀市の平均は整数値で示されています。</p>	佐賀市	全国	対全国比	55	58.1	0.95														
佐賀市	全国	対全国比																			
55	58.1	0.95																			
○評価の観点	<p>・ 知識・技能の観点では、全国62.0に対し佐賀市は60.0であり2.0ポイント下回っている。思考・判断・表現の観点では、全国55.4に対し佐賀市は52.1であり3.3ポイント下回っている。知識・技能の開きに比べ、思考・判断・表現の開きが大きくなっている。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>評価の観点</th> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>知識・技能</td> <td>60</td> <td>62.0</td> <td>0.97</td> </tr> <tr> <td>思考・判断・表現</td> <td>52.1</td> <td>55.4</td> <td>0.94</td> </tr> </table>	評価の観点	佐賀市	全国	対全国比	知識・技能	60	62.0	0.97	思考・判断・表現	52.1	55.4	0.94								
評価の観点	佐賀市	全国	対全国比																		
知識・技能	60	62.0	0.97																		
思考・判断・表現	52.1	55.4	0.94																		
○内容	<p>・ 言語の特徴・情報・言語文化に関する事項では、全国62.0に対し佐賀市は60.0であり、2.0ポイント下回っている。</p> <p>・ 話すこと・聞くことにおいては、全国58.8に対し佐賀市は54.3であり、4.5ポイント下回っている。</p> <p>・ 書くことにおいては全国65.3に対し佐賀市は62.0であり、3.3ポイント下回っている。</p> <p>・ 読むことにおいては、全国47.9に対し佐賀市は45.5であり、2.4ポイント下回っている。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>学習指導要領の内容</th> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化（知・技）</td> <td>60</td> <td>62.0</td> <td>0.97</td> </tr> <tr> <td>話すこと・聞くこと（思・判・表）</td> <td>54.3</td> <td>58.8</td> <td>0.92</td> </tr> <tr> <td>書くこと（思・判・表）</td> <td>62.0</td> <td>65.3</td> <td>0.95</td> </tr> <tr> <td>読むこと（思・判・表）</td> <td>45.5</td> <td>47.9</td> <td>0.95</td> </tr> </table>	学習指導要領の内容	佐賀市	全国	対全国比	言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化（知・技）	60	62.0	0.97	話すこと・聞くこと（思・判・表）	54.3	58.8	0.92	書くこと（思・判・表）	62.0	65.3	0.95	読むこと（思・判・表）	45.5	47.9	0.95
学習指導要領の内容	佐賀市	全国	対全国比																		
言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化（知・技）	60	62.0	0.97																		
話すこと・聞くこと（思・判・表）	54.3	58.8	0.92																		
書くこと（思・判・表）	62.0	65.3	0.95																		
読むこと（思・判・表）	45.5	47.9	0.95																		
○グラフ ※対国比・対県比(国正答率=1.00)	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>項目</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>国語</td> <td>0.95</td> </tr> <tr> <td>知・技(観点)</td> <td>0.97</td> </tr> <tr> <td>思・判・表(観点)</td> <td>0.94</td> </tr> <tr> <td>言葉の特徴(内容)</td> <td>0.97</td> </tr> <tr> <td>話す・聞く(内容)</td> <td>0.92</td> </tr> <tr> <td>書く(内容)</td> <td>0.95</td> </tr> <tr> <td>読む(内容)</td> <td>0.95</td> </tr> </table>	項目	対全国比	国語	0.95	知・技(観点)	0.97	思・判・表(観点)	0.94	言葉の特徴(内容)	0.97	話す・聞く(内容)	0.92	書く(内容)	0.95	読む(内容)	0.95				
項目	対全国比																				
国語	0.95																				
知・技(観点)	0.97																				
思・判・表(観点)	0.94																				
言葉の特徴(内容)	0.97																				
話す・聞く(内容)	0.92																				
書く(内容)	0.95																				
読む(内容)	0.95																				

■調査結果の分析【課題(弱み)】

問題番号	内容	観点	出題のねらい	分析
1 一	話す・聞く	思・判・表	必要に応じて質問しながら話の内容を捉えることができるかどうかをみる。	話合いの過程の中で、質問の意図を捉える問題である。市の平均正答率は58.6と、全国平均を4.6ポイント下回っている。【解答類型3】による誤答が最も多いことから、逆接の接続詞「でも」を読み取り、反対の意見を述べようとしたものであると誤認したと考えられる。本設問では、必要に応じて質問しながら話の内容を捉えることに課題がある。
1 二	話す・聞く	思・判・表	資料を用いて、自分の考えがわかりやすく伝わるように話すことができるかどうかをみる。	資料を用いて、自分の考えがわかりやすく伝わるように話すことができるかをみる問題である。市の平均正答率は64.5と、全国平均を4.0ポイント下回っている。藤田さんの発言の内容が(解説)の「情報の偏りが生じたり多様な意見に触れにくくなったりする状態」に当てはまり、(図)の点線の内側に当たることを理解することができなかつたと考えられる。複数の資料の情報を関連付けて考えることに課題がある。
1 四	話す・聞く	思・判・表	話合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができるかどうかをみる。	話合いの話題や発言を踏まえ、「これからどのように本を選びたいか」について自分の考えを書く問題である。全国の正答率を4.9ポイント下回り、さらに無解答率が11.7%と全国の9.9%よりも高い。本問題は、3つの条件を踏まえて書く記述問題であるが、3つ目の「実際に話すように書く」ことはできる。その一方で、1つ目の「フィルター・パブル現象の特徴について取り上げながら、これからどのように本を選びたいかを具体的に書く」という条件を書きもらした生徒が14.3%、「【話し合いの一部】の誰の発言と結びつきのかが分かるように書く」という条件を書きもらした生徒が18.2%と多く、複数の条件を満たして記述することに課題がある。
2 三	読む	思・判・表	文章の全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係を捉えることができるかどうかをみる。	本文中に示されている2つの例の役割をまとめた文の、空欄に入る言葉として適切なものをそれぞれ選択する問題である。市の平均正答率は58.4と、全国平均を6.1ポイント下回っており、全ての設問の中で最も全国との差が大きい。本設問では、選択肢が4つある中で、【解答類型4】による誤答に集中している。これは、「ネギの葉」の例が、どの部分の主張を説明するために示されているのか適切に理解していないためだと考えられる。また、「二次元的」「三次的」という言葉の意味が理解できておらず、本文中に示された言葉の意味を捉えることもできていないと考えられる。本設問では、文章全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係を捉えることに課題がある。
2 四	読む	思・判・表	目的に応じて必要な情報に着目して要約することができるかどうかをみる。	本文に書かれていることを理解するために、着目する内容を決めて要約する問題である。市の平均正答率は38.3と、全国平均を4.3ポイント下回っている。無解答率は8.8%と頑張っ書こうとした生徒が多い。本設問では、3つの条件を満たしながら書くことが課題づけられているが、そのうちの「選んだ【着目する内容】について、必要な情報を適切に取り上げて書いている」という条件を満たしていない解答が37.7ポイントと高い。このことから、文章の内容を正確に理解できていないことや、選択した【着目する内容】に対して取り上げなければならない情報が不十分、または適切ではないことが考えられる。本設問では、目的に応じて必要な情報に着目することに課題がある。
3 四	書く	思・判・表	表現の効果を考え、描写するなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫することができるかどうかをみる。	表現を工夫して物語の最後の場面を書き、工夫した表現の効果を説明する問題である。市の平均正答率は43.9と、全国平均を5.4ポイント下回っている。また、無解答率が17.7とすべての設問の中で最も高い。本設問では、2つの条件を満たしながら書くことが課題づけられているが、そのうちの「表現を工夫して書くことで、どのような効果があるのかを具体的に示す」という条件を満たしていない解答が28.7ポイントと高い。それまでに書かれた内容から物語の続きを想像し、表現を工夫しながら書くことはできている。しかし、その表現の工夫と、読み手に与える効果を関連付けて考えることができていないと考えられる。本設問では、表現の効果を考え、その効果について説明することに課題がある。





■調査結果の分析【指導改善について】

- (視点1)学んだことや自分の考えを言語化する言語活動を位置付けた学習の積み重ねについて  
 学習指導要領「国語科」の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することを目指す」と設定されている。各領域の内容に着目すると、自分の考えをもつことや深めること(考えの形成)やそれを言語化すること(共有)について、各学年の指導内容に記述されている。  
 自分の考えを言語化する言語活動を位置付けた単元学習において、大切にしたいのは、「単元を貫く言語活動」を適切に設定することである。学習を主体的な学びにするためにも、生徒の意欲が高まる言語活動を仕組んでいきたい。各単元において、まずは自分の考えを形成するために、協働的な学びの中で自分の考えを深めたり、広げたりする場面の設定を行う。そして、形成した考えを伝える手段として、言語活動を設定していきたい。特に今回の調査結果から、「書くこと」において課題が見られた。そのため、いくつかの条件を満たして、自分の考えを記述するような活動を多く仕組んでいきたい。  
 さらに、学んだことの言語化については、単元毎の振り返りを有効に活用したい。単元の適切な場面で、どのようなことを学んだのか、どのようなことを考えたのか、これからの学びにどのようにつなげていくのか等、ポイントを示し、記述する時間を保障する。そうすることで、主体的に学びに向かう生徒を育成できると考える。
- (視点2)国語科における家庭学習や自主学習の充実について  
 今回の調査では、主張と例示を結び付けて説明的文章を読み解くことや、提示された条件に応じて記述することに課題が見られた。授業の中で、学習指導要領を基に意図的に学習課題や言語活動を設定し、生徒に身に付ける力として示し指導を行っているが、これらの学習活動を生徒自身が学びとして生かしていない現状がある。授業では限られた配当時間の中で指導事項をおさえる必要があるため、課題の解決の一つとして、学校での学びを生かした家庭学習への取り組みが考えられる。  
 まず、読み書きについては、積極的かつ自主的に読書活動を行い、語感を磨く必要がある。インターネットやスマートフォンの急速な普及により、識字率がますます下がっていると考えられる。今回の調査においても、文章中に用いられている言葉の意味を理解できず、誤った解答をするという傾向が見られた。そのため、学校や家庭における読書活動を通して、さまざまな文章にふれる必要があると考えられる。  
 また、提示された条件に応じて記述することについては、複数の条件を満たし、関連付けながら作文を書くなどの取り組みを積極的に行い、文章を書くことへの抵抗感を軽減していく必要があると考えられる。今回の調査では、記述式の問題が3問設定されていたが、いずれも無回答率が高く、文章を書くことへの抵抗感が強く表れている。これもまた、スマートフォン等の普及率が高まったことから、文字を書く機会や文章を考える機会が減ったことが影響していると考えられる。
- (視点3)他教科・他領域等と関連付けた指導  
 国語科では、(視点1)にもある通り、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することを目指す。その中で、社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるよう、また、社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養うよう指導を行う。そこでは、他教科・他領域等と関連付けた指導が大変有効である。  
 言語能力は、全ての教科等の学習の基盤となる。「教科等横断的な視点」をもち、国語科で育てた力を学習の基盤として、「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」など、汎用的な資質・能力の育成を図っていく。「他教科・他領域と関連付ける」というと、各教科等の教材・題材の主活動の類似性を中心に、活動のみを関連付ける実践が多く見受けられる。今回の調査結果から、「自分の考えをまとめることに課題があり、書き問題への抵抗感が高いこと」が明らかになった。そのため、学校全体で課題の共有をし、日頃から教育活動や学習の中で、適切な機会を捉えながら、根拠に基づいて自分の考えをもつこと、協働的な学びにより自分の考えを広げたり深めたりすること等を意図的に仕組む。また、自分の考えを相手に的確に伝えるためには、「書くこと」が有効であるという成功体験を生徒に多く積ませることで、「書くこと」への抵抗感をなくしていきたい。国語で培ったスキルを他教科で生かし、相互に資質・能力の伸長を行うことで、他教科・他領域等と関連付けた指導となると考える。

■評価の観点については、以下のように表記しています。 ■内容については、以下のように表記しています。

評価の観点	表記
知識・技能	知・技
思考・判断・表現	思・判・表

内容	表記
言語の特徴や使い方、情報の扱い方、言語文化	言語の特徴
話すこと・聞くこと	話す・聞く
書くこと	書く
読むこと	読む

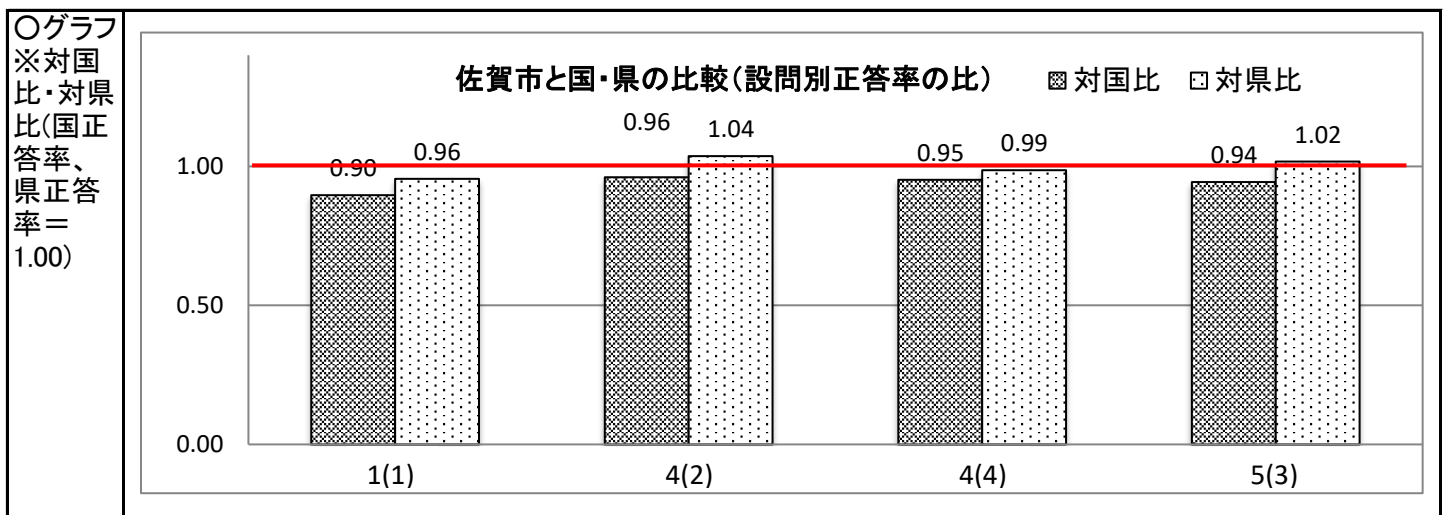
◆ 令和6年度 全国学力・学習状況調査結果 《小学校・算数科》 ◆

■ 調査結果の概要

	問題の結果																								
○全体	<p>・ 佐賀市平均正答率は、全国平均を1.4ポイント下回る。昨年度の0.5ポイントに比べやや差が広がっている。全16問中、全国平均を上回っているのは、4問であったが、その数も昨年度8問から半減している。一方、無解答率は、全国平均を上回るのは1問のみであり、昨年度の7問よりも大きく減っている。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>62</td> <td>63.4</td> <td>0.98</td> </tr> </table> <p>※ 佐賀市の平均は整数値で示されています。</p>	佐賀市	全国	対全国比	62	63.4	0.98																		
佐賀市	全国	対全国比																							
62	63.4	0.98																							
○評価の観点	<p>・ 全国平均に比べ、「知識・技能」で、1.4ポイント下回るが、「思考・判断・表現」は全国平均とほぼ同等である。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>評価の観点</th> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>知識・技能</td> <td>71.4</td> <td>72.8</td> <td>0.98</td> </tr> <tr> <td>思考・判断・表現</td> <td>50.8</td> <td>51.4</td> <td>0.99</td> </tr> </table>	評価の観点	佐賀市	全国	対全国比	知識・技能	71.4	72.8	0.98	思考・判断・表現	50.8	51.4	0.99												
評価の観点	佐賀市	全国	対全国比																						
知識・技能	71.4	72.8	0.98																						
思考・判断・表現	50.8	51.4	0.99																						
○領域	<p>・ 「B図形」は、昨年度より向上し、全国平均の差が無くなった。「Dデータ活用」も、ほぼ全国平均と同等である。「A数と計算」では1ポイント「C変化と関係」では、2.6ポイント下回っている。「C変化と関係」は、昨年度よりも差が広がっている。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>学習指導要領の領域</th> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>数と計算</td> <td>65</td> <td>66</td> <td>0.98</td> </tr> <tr> <td>図形</td> <td>66.1</td> <td>66.3</td> <td>1.00</td> </tr> <tr> <td>測定</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>変化と関係</td> <td>49.1</td> <td>51.7</td> <td>0.95</td> </tr> <tr> <td>データの活用</td> <td>61.2</td> <td>61.8</td> <td>0.99</td> </tr> </table>	学習指導要領の領域	佐賀市	全国	対全国比	数と計算	65	66	0.98	図形	66.1	66.3	1.00	測定	-	-	-	変化と関係	49.1	51.7	0.95	データの活用	61.2	61.8	0.99
学習指導要領の領域	佐賀市	全国	対全国比																						
数と計算	65	66	0.98																						
図形	66.1	66.3	1.00																						
測定	-	-	-																						
変化と関係	49.1	51.7	0.95																						
データの活用	61.2	61.8	0.99																						
○グラフ ※対全国比(国正答率=1.00)	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>項目</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>算数</td> <td>0.98</td> </tr> <tr> <td>知・技(観点)</td> <td>0.98</td> </tr> <tr> <td>思・判・表(観点)</td> <td>0.99</td> </tr> <tr> <td>数と計算(領域)</td> <td>0.98</td> </tr> <tr> <td>図形(領域)</td> <td>1.00</td> </tr> <tr> <td>測定(領域)</td> <td>0.00</td> </tr> <tr> <td>変化と関係(領域)</td> <td>0.95</td> </tr> <tr> <td>データ活用(領域)</td> <td>0.99</td> </tr> </table>	項目	対全国比	算数	0.98	知・技(観点)	0.98	思・判・表(観点)	0.99	数と計算(領域)	0.98	図形(領域)	1.00	測定(領域)	0.00	変化と関係(領域)	0.95	データ活用(領域)	0.99						
項目	対全国比																								
算数	0.98																								
知・技(観点)	0.98																								
思・判・表(観点)	0.99																								
数と計算(領域)	0.98																								
図形(領域)	1.00																								
測定(領域)	0.00																								
変化と関係(領域)	0.95																								
データ活用(領域)	0.99																								

■調査結果の分析【課題(弱み)】

問題番号	領域	観点	出題のねらい	分析
1 (1)	数と計算	知・技	問題場面の数量の関係を捉え、式に表すことができるかどうかをみる。	全国平均を6.4ポイント下回っている。本設問は、問題場面の数量の関係を捉え、持っている折り紙の枚数を求める式を選ぶ問題だが、問題場面の「少ない」という言葉から形式的に減法を用いると考えている誤答が多い。数量の関係をつかみにくい問題の解決において、問題の文脈に沿って図などに表すことを通して、数量の関係を捉えることに課題が見られる。このことから「多い」から加法、「少ない」から減法のように形式的に立式するのではなく、図などを用いて数量の関係を捉えさせていくことが大切だと考えられる。
4 (2)	変化と関係	思・判・表	速さが一定であることを基に、道のりと時間の関係について考察しているかどうかをみる。	全国平均を2.7ポイント下回っている。時間と道のりが比例関係にあることを用いたり、道のりと時間と速さの関係を基に、速さが一定であることを基に、道のりと時間の関係について考察する問題である。3分間で180m進むため、分速60mであるが、「1分間で180m進む」と誤って捉え、1800mを移動するのにかかる時間を求めていると考えられる誤答が11.9%と最も多かった。時間と道のりという2つの数量の割合を、速さという一つの数量としてとらえる「速さ」の概念の正しい理解や、速さが一定の場合には道のりと時間が比例関係にあることの理解が十分でないことが考えられる。
4 (4)	変化と関係	知・技	速さの意味について理解しているかどうかをみる。	全国平均を2.6ポイント下回っている。家から図書館までの速さを求める場合には、問題の場面から、家から図書館までの道のりと時間を読み取り、それらを基にして速さを求める問題である。自転車の速さが、家から郵便ポストまで分速200m、郵便ポストから図書館まで分速200mであるとき、家から図書館までは分速400mになると誤って捉えている誤答が27.8%と最も多かった。速さは、単位時間あたりに進む道のりで表されるという、速さの意味についての理解が十分でないと考えられる。問題場面のヒントとなる図があるにも関わらず、正しい答えを導くことができていることにも課題がある。日常の具体的な場面に対応させながら、速さなど単位量あたりの大きさについて、実感を伴って理解できるようにすることが大切である。
5 (3)	データ活用	思・判・表	折れ線グラフから必要な数値を読み取り、条件に当てはまることを言葉と数を用いて記述できるかどうかをみる。	全国平均を2.5ポイント下回っている。折れ線グラフから、桜の開花日について、3月の回数と4月の回数が最も多い年代を読み取るとともに、その年代における3月と4月の回数の差を記述する問題であった。誤答では、どちらか一方を記述しているものが多く、問題の条件に沿った答え方ができていないことが分かった。1つの問題において複数の答えを求めたり、いくつかの条件に当てはまる解答をしたりすることに課題が見られる。そのため、問題で問われている内容を正確に読み取る力をつけたり、いくつかの条件を提示した問題に触れたりしていくことが必要だと考える。



■調査結果の分析【指導改善について】

- 【主体的・対話的で深い学びになるための工夫】  
今年度、各問題における無解答率は、ほとんどの設問で全国平均よりも低かった。問題や課題に対して、何とかがんばりたいという意欲を感じる。しかしながら、誤答の分析を行うと、注意深く考えたり粘り強く考えることができない児童が多く、問題を受け身的に取り組んでいることが伺える。そこで、今年度も昨年度同様、主体的に学習に取り組むことができるように、児童が自ら数値を決めたり、形を予想したりする活動が必要である。また、児童が数学的な見方・考え方を働かせながら、自分の考えと友達の考えを比較したり、友達の考えを想像したりする場面を仕組むことで、問題を発展的に考えたり、日常生活と結び付けて考えようとしたりできるよう授業を仕組むことも重要である。さらに、算数科の特性である「日常生活の中で、社会の事象を数理的に捉え、数学的に処理し、問題を解決することができること」を、子どもたちに気づかせその良さを実感させる必要もある。
- 【日常生活と算数を関連させた単元構成の工夫】  
問題場面における2つの数量関係を正しく捉えることができていなかったり、問題で示された多くの情報から必要な情報を取捨選択したりすることに課題が見られた。これは昨年度同様、佐賀市においても、全国的にも課題となっていることである。教科書の問題は、課題解決のために必要な数値のみが示されていることが多い。日常生活で数学的な課題を解決しようとする場合には、自ら必要な情報を収集・整理し、身に付けた知識・技能を活用しなければならない。そこで、日頃の学習から、日常生活に関わる情報過多または情報不足の問題を提示し、児童が答えや解決方法についての見通しを立てたり、課題解決に必要な数値を探したり選択したりする活動に取り組ませることが大切である。課題解決に至るまでに、意見交流の場を設定し、自分の考えを表現したり、他者の多様な考えにふれたりして、思考の幅を広げることができるような単元構成の工夫が必要である。
- 【図・式・言葉を用いた思考・判断・表現力の育成】  
佐賀市の正答率は、4領域「数と計算」「図形」「変化と関係」「データの活用」の領域別に見ると、全領域において、全国の正答率を下回る結果となっている。なかでも、「変化と関係」領域においては、2.6ポイントと最も差が出ている。「単位量当たりの大きさ」の学習に対して苦手意識をもつ児童は全国的にも多く、佐賀市においても「速さ」の概念を十分に理解できていない児童が多い。課題を克服させるためにも、公式「速さ＝道のり÷時間」や答えを導くための形式的な手順だけを覚えるのではなく、図にかいて数量の関係を示し、その数量が何を表しているのかを理解する学習が必要不可欠である。また道のり・時間・速さを図に表したものを式にしたり、式に表した関係を図に表したり、図や式を関連させて言語化させたりすることが大切である。また、実際の生活場面と関連させた学習を仕組み、単位量当たりの大きさの概念や数量の関係を実感を伴って理解できるようにする必要がある。  
児童が苦手とする課題に対しては、日頃の学習から、図・式・言葉を関連させて考えさせ、可視化して意味理解を深めさせたい。また学習過程の中に、対話的な学びを位置付け、ペアやグループでの交流活動を仕組み、児童が自分の考えを他者へ筋道を立てて表現したり、一つの考えをよりよいものへと高め合ったりする中で、思考・判断・表現力を育成していくことが重要である。

■評価の観点については、以下のように表記しています。 ■領域については、以下のように表記しています。

評価の観点	表記
知識・技能	知・技
思考・判断・表現	思・判・表

領域	表記
数と計算	数と計算
図形	図形
測定	測定
変化と関係	変化と関係
データの活用	データ活用

◆ 令和6年度 全国学力・学習状況調査結果 《中学校・数学科》 ◆

■調査結果の概要

	問題の結果																				
○全体	<p>・ 佐賀市の平均正答率は、全国平均と比べて-5.5ポイントで、昨年の-3ポイントに比べて差が広がっている。全16問で全国正答率を下回っており、10ポイント以上の差がある問題が2問、その他にも5ポイント以上の差がある問題が5問あった。無解答率については、記述式の問題全5問で全国より3ポイント程度高かった。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> <tr> <td>47</td> <td>52.5</td> <td>0.90</td> </tr> </table> <p>※ 佐賀市の平均は整数値で示されています。</p>	佐賀市	全国	対全国比	47	52.5	0.90														
佐賀市	全国	対全国比																			
47	52.5	0.90																			
○評価の観点	<p>・ 全国平均に比べて、「知識・技能」で-4.5ポイント、「思考・判断・表現」で-7.4ポイントとなっており、活用力を問う記述式問題での正答率の低さに影響している。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>評価の観点</th> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>知識・技能</td> <td>58.6</td> <td>63.1</td> <td>0.93</td> </tr> <tr> <td>思考・判断・表現</td> <td>21.9</td> <td>29.3</td> <td>0.75</td> </tr> </tbody> </table>	評価の観点	佐賀市	全国	対全国比	知識・技能	58.6	63.1	0.93	思考・判断・表現	21.9	29.3	0.75								
評価の観点	佐賀市	全国	対全国比																		
知識・技能	58.6	63.1	0.93																		
思考・判断・表現	21.9	29.3	0.75																		
○領域	<p>・ すべての領域で全国平均を下回っており、特に「数と式」「図形」の領域において、その差が大きい。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>学習指導要領の領域</th> <th>佐賀市</th> <th>全国</th> <th>対全国比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>数と式</td> <td>44.6</td> <td>51.1</td> <td>0.87</td> </tr> <tr> <td>図形</td> <td>33.8</td> <td>40.3</td> <td>0.84</td> </tr> <tr> <td>関数</td> <td>57.2</td> <td>60.7</td> <td>0.94</td> </tr> <tr> <td>データの活用</td> <td>50.3</td> <td>55.5</td> <td>0.91</td> </tr> </tbody> </table>	学習指導要領の領域	佐賀市	全国	対全国比	数と式	44.6	51.1	0.87	図形	33.8	40.3	0.84	関数	57.2	60.7	0.94	データの活用	50.3	55.5	0.91
学習指導要領の領域	佐賀市	全国	対全国比																		
数と式	44.6	51.1	0.87																		
図形	33.8	40.3	0.84																		
関数	57.2	60.7	0.94																		
データの活用	50.3	55.5	0.91																		
○グラフ ※対全国比(全国正答率=1.00)	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>領域</th> <th>対全国比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>数学</td> <td>0.90</td> </tr> <tr> <td>知・技</td> <td>0.93</td> </tr> <tr> <td>思・判・表</td> <td>0.75</td> </tr> <tr> <td>数と式</td> <td>0.87</td> </tr> <tr> <td>図形</td> <td>0.84</td> </tr> <tr> <td>関数</td> <td>0.94</td> </tr> <tr> <td>データ</td> <td>0.91</td> </tr> </tbody> </table>	領域	対全国比	数学	0.90	知・技	0.93	思・判・表	0.75	数と式	0.87	図形	0.84	関数	0.94	データ	0.91				
領域	対全国比																				
数学	0.90																				
知・技	0.93																				
思・判・表	0.75																				
数と式	0.87																				
図形	0.84																				
関数	0.94																				
データ	0.91																				

■「評価の観点」や「内容・領域」については、以下のように表記しています。

評価の観点	表記
知識・技能	知・技
思考・判断・表現	思・判・表

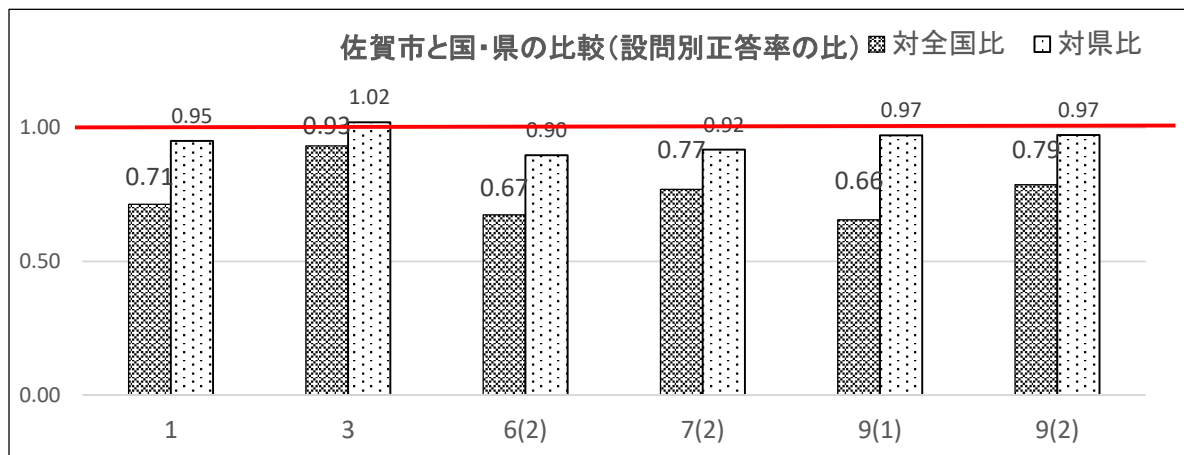
領域	表記
数と式	数と式
図形	図形
関数	関数
データの活用	データ



■調査結果の分析【課題(弱み)】

問題番号	領域	観点	出題のねらい	分析
1	数と式	知・技	連続する2つの偶数を、文字を用いた式で表すことができる。	整数 $n$ を用いて、連続する2つの偶数を表す問題。正答率は24.8%で、全国平均と比べて-10ポイントであった。誤答と合わせても、 $2n$ や $2n+\square$ の形で表せている回答は30%に満たない一方で、 $n$ と $n+1$ 、 $n$ と $n+2$ といった表し方での誤答が約30%あった。 単に知識を問う問題であり、偶数 $=2\times(\text{整数})$ で表されることを理解できていないことや、 $2n$ や $2n+\square$ といった表し方が定着していないことが原因と考えられる。
3	図形	知・技	回転移動について理解している。	正方形が回転移動した際に、回転前の頂点に対応する点を選択する問題。正答率は63.6%で、全国平均正と比べて-4.7ポイントであった。正方形の左下の点を回転移動するため、回転移動した後の左下の点を選ぶ生徒が15.0%と多かった。頂点と回転の中心、移動後の頂点を結ぶ線分でできる角の大きさが一定の大きさになることを理解できていなかったと考えられる。
6	(2) 数と式	思・判・表	目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができる。	問題場面をもとに、図中の3つの数の和が、他の3つの数の和の2倍になることを説明する問題。完全正答率は4.2%、必要な記述を欠いている準正答も合わせると24.2%で、全国平均と比べて-11.7ポイントであった。 $2\times(\text{整数})$ の式に表し、言葉で説明をする手順を踏めていない準正答については、結論に導くために根拠を示す習慣がついていないと考えられる。一方で、60%の生徒が $(a+b)+(b+c)+(c+a)$ を $2(a+b+c)$ や $2a+2b+2c$ の式に整理できていないことから、計算でのつまずきも大きな原因になっているようである。
7	(2) データ	思・判・表	複数の集団のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる。	実験データをもとに作成した5つの箱ひげ図を比較し、箱の位置や四分位範囲の変化を根拠にして、ことがらが正しい理由を説明する問題。完全正答率は7.6%、必要な記述を欠いている準正答も合わせると19.9%で、全国平均と比べて-6.0ポイントであった。 準正答では、中央値の変化について記述しているものが多かったと推測される。また、図の見た目からはっきりした特徴が出ており、解答の手掛かりはあると思われるが、無解答が31.9%であったことから、記述式の解答を毛嫌いし、避けている生徒も多いように感じている。
9	(1) 図形	思・判・表	筋道を立てて考え、証明することができる。	2つの正三角形の頂点を結んでできる三角形をつくる時に、三角形の合同を基にして証明する問題。正答率が16.9%で、全国平均と比べて-8.9ポイントであった。結論となることがらを、仮定として使用している誤答が13.0%と多かった。問題から、仮定となることがら、結論となることがらを読み取ることや、図から証明に必要なことがらを読み取ることが理解できていなかったと考えられる。また、見つけたことがらを、根拠を基に説明し、記述することが苦手とする生徒が多いことも考えられる。
9	(2) 図形	知・技	事象の角の大きさに着目して観察し、問題解決の過程や結果を振り返り、新たな性質を見いだすことができる。	点を線分上で動かしたときに、三角形にできる2つの角の和についていえることについて選択する問題。正答率は21.0%で、全国平均と比べて-5.7ポイントであった。2つの三角形が合同であることに着目し、2つの角の和が常に正三角形の1つの内角と等しいことに気づくことができなかった生徒が多かったと考えられる。与えられた図形や条件から、等しい辺や角を見出すことが苦手とする生徒が多いことも考えられる。

○グラフ  
※対国  
比・対県  
比(国正  
答率、  
県正答  
率=1.00)



■調査結果の分析【指導改善について】

○数と式の分析及び指導改善

・整数 $n$ を用いて連続する2つの偶数を表す【1】は、単に知識を問う問題であるが正答率が低く、偶数 $=2 \times$ (整数)で表されることを理解できていないことや、 $2n$ や $2n + \square$ といった表し方が定着していないことが原因と考えられた。1年時に「数の表し方」として1時間の小単元で学習するが、端的に $2 \times$ (整数)、 $2n$ と表すことに留めず、 $n=4$ ならば8、 $n=5$ ならば10など、多くの具体例を示して確認することや、文字を使うことによりすべての場合を1つの式で表すことができるという「文字式で表すことの良さ」を、「文字と式の単元全体を通して触れていく」ことが必要であると考えられる。

・ある式が、もうひとつの式の2倍になることを説明する【6】(2)では、言葉で説明する手順を正しく踏むことができている準正答が多かった。根拠を十分に示していないことが原因であるので、普段の授業から、「なぜそう考えられるかな?」といった問い返しをしたり、言葉不足な発言があれば何が足りなかったか確認したりするとよい。

また、無回答26.3%を含む約61%が $(a+b)+(b+c)+(c+a)$ を $2(a+b+c)$ や $2a+2b+2c$ の式に整理できていなかった。文字式の計算を苦手としている生徒に関しては、反復練習による基礎・基本の定着が必要であることは明確である。一方で(1)も含め3ページにわたる問題文の量の多さに、問題の意味を理解できない、粘り強く取り組めない、もしくは、どう答えていいかわからない生徒が、無解答など全体の半数近くであると考えられる。これは数と式の領域に限ったことではないが、様々な活用の問題に触れさせ、視覚的に理解しやすくなるように工夫したり、友達同士で学び合いながら難しい問題に諦めずに取り組み、問題解決できたという成功体験を積み重ねることが大事であると思われる。

○データの活用の分析及び指導改善

・実験データをもとに作成した5つの箱ひげ図を比較し、ことがらが正しい理由を説明する【7】では、箱の位置、もしくは、四分位数や四分位範囲がだんだん変化していることを根拠に説明したものが完全正答であるが、全体の7.6%と少なかった。12.3%と上回った準正答については、中央値の変化について記述しているものが多かったと推測されるが、小学校から学んでいる中央値は生徒にとって扱いやすいことが理由であると思われる。中央値を含む代表値は多数のデータの中の1つの値でしかなく、データの分布の傾向を探るには適していないことをきちんと理解させたい。それに合わせて、「半数のデータが箱の中に含まれていて、データ全体を大まかに捉えることができる箱ひげ図の良さ」を感じられる指導が必要であると思われる。単に「データ→箱ひげ図」「箱ひげ図→データ」の変換に終始するのではなく、身近にあることをテーマとして箱ひげ図に整理してレポートを作成したり、複数の箱ひげ図を比較して読み取れることを考えて友達と意見交換したりするなど、この単元での指導の工夫が大事である。

○図形領域の分析及び指導改善

・図形の移動について問う問題【3】では、平均正答率が63.6%で、全国平均と比べて-4.7ポイントであった。移動する際に、頂点がどのように移るか、正しく理解できていなかったことがわかる。授業では、まず身近な図形の中にある移動について考えさせ、イメージできるようにすることが必要である。また、どのような移動になるのか、口頭や記述で手順を確認する場面を設定することも効果的である。

・あることがらについて証明することを問う【9】(1)では、平均正答率16.9%で、全国平均と比べて-8.9ポイントであった。また、無解答率が36.1%と高く、全国平均を2.5ポイント上回っている。証明は記述しているが、問題文や図から根拠となることがらを読み取ることや、証明を記述することに苦手意識を持っている生徒が多いことが見受けられる。証明を正しく理解させるためには、証明の方針をしっかりと立てることができるようにすることが大切である。まずはペア活動やグループ活動を通して、口頭で説明し、次にメモ的に記述させ、最後に簡潔に記述できるように段階的に指導するとよい。その際には、根拠となることがらを説明できるように意識させることが大切である。着目すべき性質や関係をインプットする、考えを記述しながらアウトプットする過程を通して、思考が整理されていき、筋道を立てて数学的に説明する力が身についていくものだと考える。